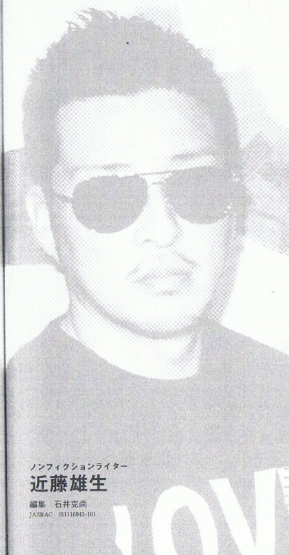


# 歌い続ける本当の理由

## 若旦那

シンガーソング  
ライター

東京で一番のワルが、更生してレゲエスターになる道程



文学と音楽の最前線  
front line of literature and music

ノンフィクションライター

近藤雄生

編集 石井克尚  
JASRAC B1116043-01

本名を新羅慎二という。「新羅」と書いて「にら」と読む。珍しい苗字だ。そして、少なくとも人がこう思ったかもしれない——韓国・朝鮮系の名前だろうか、と。幼いころから彼を知っているのに、ぼくは最近になってそんなことを

思いついた。著名人にはセンチティブでもあらゆるその点について、思い切っただけでみると、彼は身を乗り出すようにしてこう言った。

「そういう話は聞いたことないんだけど、おれは、実は韓国の血が入ってんじゃないかなって勝手に思ってる。もしかすると差別的に聞こえちゃうかもしれないけど、明らかにおれ勝気なんだよ。もめても引かないし、すぐ燃えちゃう血がたぎるんだ。それがもしかして大陸の血なのかなって。前に韓国に行ったときに、あれ？ って思ったんだ。「新羅」だらけなんだよ。新羅飯店とか、新羅ホテルとか。もしかしてこ、おれの地元なんじゃないかなって……」

いかつい風貌ながら、軽くゆったりとした口調で、はっはっ顔を崩して笑いながら話す。

何も包み隠さずもない。後にI.W.ハーパーのソング割りを何杯か飲んだ若旦那は、いつになくリラックスしているように見えた。

### 若い世代に熱狂的支持

2011年10月のある日、大阪のホテルで、ぼくは若旦那と久々に食事をするようになった。ちょうど、M・I・N・M・Iのツアー中のことだ。「クロスロードグループ」の社長であり、一帯に全国を回りかなり忙しくしているときだった。若旦那は、彼女のマネージメントを行うこと。運良く時間が空いたという。若旦那の妻であり、絶大な人気を集めるM・I・N・M・Iの実家そばの駅で待っている。彼は、前後に子どもを乗せられる「ザ・ママチャリ」というような自転車に乗って、赤いTシャツとジーンズ姿で現れた。二人だけで食事というのは、初めてのことであったかもしれない。

同じ地元で、小中学校時代の一部を一緒に過ごした幼馴染。ぼくは彼をいまま、当時と変わ

らず「らっち」と呼ぶ。こゝ一年半ぐらいの間に度々会うようになるまでは、7年もの間が空いていた。

その空白期間の前、最後に会ったのは2003年、ぼくが5年半に及ぶ長期の旅に出る直前に、中学校の友だち20人ぐらいが自分の出発を名目集まってくれたときだ。27歳で、まだ広名を知られる前の若旦那はそのとき、饒別代わだったのか、こう言っています。一枚のCDをくれた。

「メジャーデビューが決まったんだ。これがそのデモ版のCDだよ」

それこそが、4人組のレゲエグループ「湘南乃風」のデビューアルバムとなるものだった。

それから早9年近く、その間に「湘南乃風」は若い世代に熱狂的に支持される存在となった。2006年には「祝恋歌」を発表し、60万枚を売り上げる大ヒットを記録。アルバムも3rd、4thアルバムがともにオリコン1位を獲得するまでになった。そうして確固たる地位を築いていった4人の中でも、若旦那は独特な存在感を放ち続けた。いまや湘南乃風としての活動にとどまらず、ソロのシンガーソング

に包まれて、小さな宇宙のようだった。

若旦那は、新曲「いのちの桜の記憶」をこの日初めて公の場で歌う。彼にとって初めてのソロでのシングル曲。これまで湘南乃風として歌ってきた不良賛歌とでも言える曲目から一転し、親への感謝を歌った。2010年1月のハイチでの大地震をきっかけに、もし自分が瓦礫の中で最期を迎えなければならなくなったとしたら、そのとき自分は何を言うだろうか。それをイメージして書いた曲だという。

リハーサルが始まる。上下黒のカットソーとスウェットパンツというラフな装いのまま、誰もいない客席に向かって歌い出した。初めて生で聴く彼の歌声は、見事にホール全体を震わせた。

Thank you for P P Thank you for パバ

ありがとーの一言言えなく

今がチャンスだから

でかい声で言わせておくれよ

Thank you for P P Thank you for パバ

照れながら今日だけは言うよ

ライターとしても歌い、また社長として事務所的经营もする。数々の社会的な活動にも取り組み、絶大な支持と注目を集め続けているのだ。

ワカダンナ——!!

若旦那が歌う姿をぼくが初めて見たのは、2010年の大晦日、大阪城ホールのライヴのリハーサルのときだった。「大阪城カウントダウン祭2010-2011」初夢。M I N M I をメインとしてレゲエミュージシャンが複数登場する中、若旦那も4曲ほど、歌うことになっていた。

「アーティスト一人呼ぶのもやっぱり金かかるしね。おれだったらM I N M I のギターリストに弾いてもらうだけでいいし、ギヤラもいらぬから」

明らかに社長業に勘足があることを匂わせた。しかし一方で、楽屋では熱心に発声練習をし、高城の音の調整をしている。

ホールの外では肌を突き刺すような寒さの中で、開場を待つ大勢のファンが熱気を高めている。一方リハーサル開始前のホール内は、静寂と間と淡い光

あんた連の子供でほんとよかつたなって

(いのち)

ストレートなメソセージが熱い歌声に乗って飛び込んでくる。この歌の中で彼が振り返る古き日々を思い出しながら、ぼくはこみ上げるものを抑えるのに必死だった。あの「らっち」が「若旦那」となった姿を初めて目の当たりにした瞬間だった。

リハーサル後、「感動して泣いちゃったよ」と少し照れながら本人に伝えると、「ほい」とに「よかつた?」と頬を緩め、ほっとしたような顔をした。

その2時間後、2010年も残すところ3時間となったころ、会場がファンたちの熱気で張り裂けんばかりになる中、DJの声が場内に大きく響いた。

「ワカダンナ——!!」

会場がドカンと盛り上がった瞬間に、若旦那は、一気にステージへと駆け上がる。彼がステージに姿を現すと、客席はさらに大きな絶叫でホールを揺らす。地響きがした。全身に鳥肌が立った。ステージを見ると、そこには、1万人を一瞬で沸かすことが

できる一人の大物歌手の姿があった――。

ほかはこの若旦那という男と、幼少期をともしない鮮烈なカリスマ性を備えはじめたその時代を知るからこそ聞ける言葉があるのかもしれない。そんな希望を抱きながら、彼の姿を追うようになった。

## 難病支援と「レゲエ」

「ワカ（＝若旦那）を見ると、戒められるんですよ。おれらおっさんがつとちゃんとしなとって」

若旦那を度々番組で取り上げてきた日本テレビ系・NEWS ZEROのプロデューサー山崎大介はそう言う。

「いまの若い子たちは、明日がよくなるわけがないのを知っている。ほんとに先が不安だと思っんです。でもワカは、「そうじゃねーんだよ」って、汗かきながらライブで言う。ちゃんと怒ってくれる大人がいない中、この人の言うことは信じてみようかなって思わせるだけのものがあるんですよ、彼には」。いろいろなミュージシャンを見てきた彼がこうも言

う。「これまでに見たことのないタイプですよ」

何かひとつでも 夢中になれる物を

何かひとつ 胸に持ってみようよ

過去の傷跡を鼻で笑う大人に何がわかる

ハートで生きてみようよ (何かひとつ)

人生良い時ばかりじゃねえんだ

いちいちよくよしてらねえ

自分じやどうにもできねえぐらいでかい壁でも

びびっちゃいけねえ

向き合って 戦って 悩んで 苦しんで

もがいてみて

生まれた時はみんな裸

お前ならできるからがんばれ

あなたを信じ身を委ねて (守るべきもの)

極めて真つ当なことを、しかし多くの人が直接口

にはしないことを、躊躇なく声にする。無骨でストリートで、熱い。優しさど熱がこもっている。

尽さに傾り、いてもたってもいられなくなったのだ。

「突然、局に電話がかかってきたんですよ。『湘南乃風の若旦那っていいんですが、番組を見ました。何か自分でできることはありませんか』って」

山崎大介が言う。

「アーティスト本人が直接そんな電話をかけてくることはないですからね、普通。それに芸能人のボランティア活動や慈善活動というのは、売名なんて言われたりするので、ある種タブーだったんですよ」

自分にもつたい何ができるのか。若旦那は手探りしながら行動を起こしていく。湘南乃風のライブのたびに、彼はMCの中で「ムコ多糖症」の話をした。自分たちのファンなら何かを感じてくれるはずだと信じて、思ったまま率直に話した。涙みのある姿、優しく舌つ足らずな愛嬌ある話し方で、「おれたちでできること、ただ「ムコ多糖症」って言葉を覚えてくられるだけでいい。それで世論を動かそう」と、涙もろさを隠すことなく、思いを吐き出すように訴え続けた。患者たちとその家族組だけを集めてのシークレットライブも複数回行った。「楽しい思い

そんな彼のメッセージが決して言葉だけではなく、また、NEWS ZEROの山崎大介が「見たことのないタイプ」という若旦那の彼らしさが、最も顕著に表れたのはおそらく、2007年の「てるてるのち」ときだろう。湘南乃風としてのデビュー以来、パンチパーマにサングラスのいかにもワルそうなレゲエ歌手として知られていた若旦那が全力を注いで立ち上げたのが、ほんわかとした名を冠されたこの難病支援の活動だった。

2005年5月、「ムコ多糖症」という難病の存在を知る、若旦那は、テレビのドキュメンタリー番組を見る。日本に300人しか患者がいない子どもが病气。遺伝的に、ある酵素がないために、「ムコ多糖」という代償物質を分解・排出できず、それが体内に溜まってしまふことで骨や関節が変形し、内臓や脳が冒される難病だ。ほとんどの患者が10〜15歳で死に至ってしまうという。アメリカにはすでに薬がある。しかし日本ではまだ認可されていないため、日本の患者は薬を使うことができずにいくなつていく(注)。番組はそう伝えた。若旦那は、その理不

(注)ここで使っているのは、ムコ多糖症1型の治療薬「アウロラザイム」。英国で2003年9月に承認されたが、当時日本ではまだ承認されていなかった。日本では2006年10月のこと。後述の「買物の星」水原真知が買物の星の母である「アウラザイム」を、2007年7月日本承認の2007年10月の翌分かれ、それぞれ治療薬を発売。

出を作ってほしい」と患者に直接語りかけながら。

若旦那のそうした活動は、世間を大きく動かした。ついには当時の厚生労働大臣・舛添要一が動き、業の異例の早期承認が実現したのだ。そして業が承認されるのとは同時に、若旦那は湘南乃風と何組かのアーティストとともに横浜浜りーナで、患者たちも招いてのライブ「てるてるのち」を成功させた。

ムコ多発症Ⅱ型ハンター症候群の患者で、現在中学1年生の中井耀は、そうして承認された薬「エラブレース」の投与のために毎週1回病院に通う。ほかは2011年11月、大阪・豊中市の病院に、投与を受ける中井耀に会いに行った。彼は想像していた以上に元氣そうだった。しっかりと薬病に向き合いながら力強く生きる彼。そして家族の様子を見て、若旦那たちが成し遂げたことの大きさが垣間見えた。中井耀の母である中井まりは、こう言った。

「一緒にがんばろうって、若旦那さんは耀に言ってくれたんです。おれも頑張るから一緒に、って。そんなこと言ってくれた人は初めてでした」

「てるてるのち」は、おそらく若旦那自身が想像

していた以上の成果をあげた。彼に大きな達成感を与えたとはいえない。

しかしその一方で、大手事務所に所属することの窮屈さを感じ始めてもいた。それはきっと、自分のすべきこと、歌う目的が少しずつ明確になってきたからだろう。自分がなぜレゲエをやるのか、という意味もまた見えきたはずだった。

「レゲエとは「レベル（反逆の）ミュージック」。

立場の弱い人たちの叫びの声だ。だから、そういう人の声を代弁することができないのなら、それはもはや自分にとってレゲエじゃない」

彼はそう言っている。若旦那にとっては、歌の力で社会を動かすことそれ自身が、まさに歌う理由に他ならなかった。その意志を貫いて自由に好きなことを歌い訴えていくためには、独立しなければならなかった。若旦那は苦労しながらも自分の事務所を立ち上げた。そしてその後、彼らしさを存分に発揮した活動を次々に展開していく。

ハイチの大地震、東日本大震災のときも、妻のMINMIと友人のCandice JUNE（キャン

ドルアーティスト）らとともに活発な支援活動を行った。3・11後は、何度となく被災地に足を運び、歌うことで被災者を励ました。子どもたちに携帯の番号まで教えて、何かあったらいつでもかけてくれと話してまわった。こういうところが若旦那にとって、歌手として生きる理由だからだ。

はくが若旦那のライブを見るたびに激しく突き動かされるのは、決して彼を昔から知っているからというだけではない。その絶対的な行動力に圧倒されるからなのだ。おれも何かやらなければ、と強烈に思われる。若旦那の言葉は、下の世代に力を与えるとともに、きつとほくらの世代、そして上の世代にも、おれたちが動かなくてどうすんだ、という強い衝動を与えるのだ。

## 「恩返しをしたい」

若旦那を動かすものは何なのか。エイベックスで

若旦那の音楽の制作を担当する福添奈都子は言う。

「恩返しをしたいって言うんですよね。歌手は人気があつて成立する仕事。でも、ただ応援されてはか

りの状態だと、バランスがとれないんだって」

一方、何かを社会に還元したいという彼の思いについて、Candice JUNEはこう言った。

「おれは今まで散々悪いことしてきました。いいやつなんて思われたくないけど、でも、少しでもいいことして返さなきゃ」って。そう言っていました」

## 繰り返したケンカと抗争

昔から、ワルとして知られる存在だった。高校時代、六本木あたりをベースにケンカの強さで東京中に名を轟かす猛者たちとつながっていく。若旦那も当時から有名だった。

「ケンカとかしてる、とにかくものすごく血が騒ぐんだよ」

あるときは、新宿のコマ劇場前でヤクザ数十人と大乱闘をしたこともある。

「突発的に10人ぐらいのヤクザと乱闘になったら、向こうは次々に仲間が出てきて50人ぐらいになっちゃって、おれたちは格闘技やってたから腕つぶしには自信あつたし、ヤクザになんて負けねえよって

思ったんだけど、やったらものすごく強くてさ。ポコポコにやられて。でも相手の中にこっちの仲間先輩がいて、それでなんとか収まったんだよ」ケンカや抗争を繰り返した。全く前止めが利かない時期だった。

そんな高校時代の仲間、雨宮ただしがいる。ポクシングの内藤大助などが所属するスポーツツマネージメント会社「AKG GROUP」の社長となった雨宮は、若旦那と同じ年で、同様に当時東京では名の知れた不良だった。

若旦那とは高1のときにケンカを通じて知り合った。当時からライダーズジャケットを着てバイクを乗り回していた若旦那たちも、雨宮のグループの間でケンカになったのだ。だがそれをきっかけに仲良くなった。以来付き合い合いは20年近い。

当時の若旦那について聞くと、雨宮は慎重に言葉を選びながら話した。言えないことも決して少ないのだろう。

「ニラは悪いって有名だったけれど、おれらの中ではムードメーカーでしたわ。人望もあるから、周り

ら、おれは真つ当になれたんだろうな」と。

### 友人も驚いた「転身」の理由

雨宮は、当時の若旦那について鮮明に覚えていることとして、こんなことも言った。

「あいつはいつとも、弁護士やるとか、画家になるとか、医者になるとか、いろんなこと言ってたんですよ。クルクル変わるから、そのたびにおれらは「また言ってるよ」って笑ってたけど、あいつは当時から将来のことをよく考えてましたよ」

医師については、はくは一度「医学部に入りたいから家庭教師やつてくれないか」と電話をかけてきたことがあったし、画家についても、美大に通って油絵を描いていた時期もあった。彼は、あらゆる悪さをしながらも、常に自分はどうやって生きていくべきなのかを悩み、あがいた。社会の中で自分がどのような場所を占めるかは、彼にとって重要だった。そういう意味では本場のアウトサイダーではない。ハチオメチヤな面と真つ当な面が同居する「二面性」こそが、彼の最大の特徴と言える。

にはいつもあいつを慕う連中がいたんです。ニラはそういうやつらをすごくよく面倒見ました」

雨宮は、若旦那はケンカが目立つというよりも人望や面白さが際立っていたと話す。悪くなっていく仲間も本当に行き着くところまで行き着いたが、雨宮も若旦那も、かろうじて踏みとどまった。

「結局、ニラもぼくも本質的にやさしいっていうか、やるどころまでやる、みたいなことができなかったんですよな」

なぜ踏みとどまれたのかについて、若旦那はある講演会でこんなことを言っていた。

「おふくろが、本当に当たり前のことなだけで、「人を殺しやだめよ」とかずつと言いつづけてくれて、そういうのが常に頭にあったんだと思う」

若旦那にとって、教師だった母親の存在はかなり大きい。「いのち」の歌詞にも表れているが、彼が中1で私立中学を退学になると、母親の髪の毛が急に真っ白になったという。その姿を見て若旦那は驚き、土下座する。「許してください」。そしていま振り返る。「そうやって悲しんでくれる母親がいたか

高校時代が終わわり、何年かたったころ、雨宮は、

若旦那の新たな進路を聞いて驚いた。「飲み席で最近どうって聞いたら、「最近レゲエやっつてんだ」とって。新宿の小さなハコでライブやるから来てって言われて行ったら、パンパンに人が入ってて、「ニラカーン」って名前で歌ってたんですよ、あいつ」

若旦那は、これまでの何とも異なる勢いでレゲエの世界に没入していった。しかし当時親しかった人間にとって彼がレゲエというのは意外だった。互いに無名の時代に若旦那とよくつるんでいた俳優の村上幸平も、聞いたとき「レゲエ? なんで?」と驚いた。ただ、当時、村上と同じ若旦那とグダグダとつるむ仲間であった山田千勢（雑貨ブランド・株式会社C代表）は、驚きながらも、「でも、向いてるかも」と思った。彼女はそこそこ、若旦那が毎日毎日、スウェッチブックなどに猛烈にリリック（詞）を書き留めているのを見ていたし、何よりもカラオケに行くとき替え歌がハンパなくうまかったのだ。

「シャインズの「私の彼はサラリーマン」の替え歌なんかを、その場で即興で、めちゃくちゃ面白く作っ

ちやうの。ほんにすごかったよ」

しかも小・中学校時代の若旦那に、音楽や歌というイメージはなかった。しかし、若旦那自身にとっては、歌は常に意識の中にあるものだった。

「小学校のときから、歌はよく作ってたのよおれ、鼻歌で自転車乗りながら、自分の歌を取ってた」「風に吹かれながら、坂道を全速力で降りる」みたいな。でも歌が下手だったから、どっちかといえば歌を作るほうに憧れてたんだよ。小3でじいちゃんが見た。あれが初めて人前に出した詞だった。それだけ思い入れがあったからなのか、若旦那自身にとって音楽は、これまでに目指した他の職業とは全く違う種のものでした。

「それまでは、勉強とかスポーツとか、まともなことで血が熱くなったことはなかった。悪いことしてるともすごく血が騒ぐんだけど、音楽してるときの血の騒ぎ方が、ケンカとかと全く同じだったんだ。やっとな真つ当なことで血が騒いでくれた。思った。おれの中でいろんな方向に分散してたエネ

る。さうして行き着いたのが、弁護士への道だった。「被害者の会とかに行くとかすごく弁護士頼みなんだよ」。教団も弁護士を嫌がるわけ。だから、見直しを助けるなら弁護士だっと思ったんだ。単純だけど。

当時彼はほんとと誰にも兄のことは話さなかった。突然思い立ったように弁護士にならなうと周囲に言っ、一人勉強を始めたのだ。

「いまは兄貴のこともう話してると、10年間はずっとだまっていた。でもこのことを話さないよ、なんて弁護士だったのか、なぜ湘南に行ったのかを、説明できない。だから話すことに決めたんだ。おふくろにも言っただよ、おれ話すよって。おふくろは、いまでもこの話をするの嫌がってるけど」

それだけ新羅家においてこの問題は大きな影を落としていた。両親はこれが一つのきつかけとなって離婚した。兄は、信者としての道を突き進んだ。

一方若旦那は、弁護士の勉強を始めたものの、やはり自分は机の上での勉強には向いてない気が付かされる。自分が兄を救い出すことはできそうになら。するとあるとき母親が言った。「もう、十分やっ

## 兄の入信

若旦那が音楽にのめりこんだ理由はとてもここには書ききれない。が、その過程には一つ、決して外せない大きな出来事がある。それは、4つ違いの兄が突然、ある新興宗教に入信したことだった。若旦那が20歳前後のことである。

「チャラかった兄貴が、会社の寮にいたその教団の人間に誘われて入信したんだよ。ちやうどオウムのことがあった時期で、その教団もオウムと同じに見えた」「兄貴がオウムに入っちゃった」って感じで、本当にショックでさ。同じ親のもとで同じ愛情をくらって育ってきたことを考えると、おれも洗脳されちやうんじやないかって怖かったんだ。前に誘われてたんだよ、兄貴から。おれもそのころ将来について悩んでいたから。もう不良のままじゃだめだって思い始めたころで、兄貴に相談してたんだ」

しかし、若旦那はその世界に迷むことはなかった。逆になんとかして兄を引き戻そうと考えるようになった。

くれたから、好きなことをやりなさい」「吹っ切れた。そして海を求めて湘南へ移り住んだ。その地のレゲエバーで、のちに湘南乃風となるメンバーたちと出会っていた」。

## 熱く生き、獲得する言葉

「おれはミュージシャンというより、生き様自体が仕事なんだと思ってる」

前に若旦那は、はくにそう言った。自分自身が熱く生き、その中で獲得した言葉だけをストレートに歌にする。そして行動する。それが若旦那の社会との対峙の仕方と違いない。だから彼は、ミュージシャンであり続けることにすらこだわっていない。家族に何かあれば音楽をやめると彼が考えているのは、周囲の人には周知の事実。そして先のことについて聞くところ、彼はこうも言う。「39歳で転職するって古い師に言われたのがすごい気になって……。もうすぐだよな、それ。先のこととはわからない。ただ歌だけに絞っちゃうのは悔いなんてのはあるんだよ」



近藤雄生  
Yuki Kondo

1976年、東京生まれ。東京大学大学院修了後、世界各地で取材・執筆活動をしながら、5年半の海外放浪生活を経て2009年に帰国。著書に「旅に出よう」(新潮ジュニア文庫)、「遺物夫婦」(中国でお金を手帳)。(ともにミヤマ社)がある